

紅^{べに}
指^{ゆび}

室井富絵は子供を育てるため、再び花柳界に戻った。源氏名をみさ於という。二十才だった。

残されたお金で「小間物屋でも」と考えたが、父親の籍のない子供と生きるには、この世界しか知らない富絵は、心許なかった。しかたなく花柳界で年を重ねた。

子供の小糸は十三才で、六本指の少女と言われて、三味線の指さばきが見事だった。

難しいといわれる紅指の動きが特に器用だ。薬指のことを、女が紅を塗るときに使う指なのでこう呼ぶ。艶っぽい言い方だ。

指が六本あるのではないか、といわれるくらい巧みに糸を操り、そうして奏でられる調べは独特だった。

音と音との間に、判らないくらいに入る微かな音が、不思議なリズムを作っていく。

天性のものと言えた。

安宅町 川元信子

本名はクミエというが、小さい時から三味の音が良いので、周りは小糸ちゃんと呼んでいた。踊りも上手く、器量よしなので周りも本人も、この世界で生きていくものと確信していた。

富絵も「みさ於」という源氏名に恥じぬ名花と言われたが、我が子も名花と言われる様な芸妓に、育ててみたいと思うようになっていた。彼女が今やっているのは、太棹の義太夫三味線だ。

三味線自身が、語っているように巧みなので、玄人の太夫さんは、邪魔になると嫌だったが、道楽で通ってくる旦那衆には、人気があった。手が細かいのが語り易いと言われた。

富絵は、以前からお座敷へ出るのを控えて義太夫を教えていた。旦那衆や、芝居好きの若旦那など習いに通って来たし、三味線を練習に来る若い芸妓もいた。中にはそれが目的の若い衆もいた。

そんな旦那衆の中に、老舗の和菓子屋で粹人として知られた若松九兵衛がいた。

ある日、中学を卒業して職人見習いに入った男の子を連れて来た。
た。

浅村透という彼は、背が高く美男だった。

「この子は戦争孤児で、施設で育ったんだが、真面目で器用だから育て甲斐があるよ。今日連れてきたのは、この子の義太夫を師匠に聴いて貰おうと思ってるね」

九兵衛は、掘り出し物を見つけたように満面の笑みで言った。

「声が良いだけじゃ」

そう言いながら、富絵は三味線を取った。

隣の部屋に控えていた小糸は、耳をそばだてた。彼の若い声は、小糸には新鮮だった。

「門前の何とかで、上手には語るけど風呂屋浄瑠璃だね」富絵は、にべもなかった。

「こんな子供にきついよ。師匠」

旦那がそういうと同時に、「おねがいます。一生懸命やりますから」と、子供っぽい声がした。

富絵は、隣の部屋を意識している透に優しい目を向けた。

「旦那さんにも、いろいろご都合があるうから、一緒に付いて来て聴いていたらいい、三味線に合わせないとね」

富絵は、九兵衛を見ながら、いたずらっぽく流し目を送った。

この日から、小糸と透は三味線と太夫として、一緒に稽古に励むことになった。

どちらも周りに、若い仲間がいなかったから、兄妹のように稽古の間も、いつも一緒だった。

小糸を相方に、透はめきめき腕を上げた。

四年目になると、二人の息はぴたり合ってきて、未熟ながらも座敷が掛かるまでになった

三味線と太夫は一对だ。芸の上だけと言っても、十七才と二十才の男女だ。

我が身を省みれば、あまりにも迂闊だったと、富絵は焦った。

すぐに、九兵衛に話して透を、菓子職人の修業に専念するようにさせ、小糸は芸妓の披露目をすることにした。

透は一人前の菓子職人になるため、旦那の口利きで、他店の菓子店へ移った。

そこは職人が他に居らず、全てを仕切るため、とても習い事をする余裕はなかった。

小糸はずっと芸事は続けていたとは言え、

「こんな半端な子と、同じ座敷に出るのは嫌だよ」

初日に姐さん芸妓に言われて、呼ばれていた座敷から帰されてから、小糸の負けん気に火が点いた。

彼女は一から、芸のおさらいを始めた。

今までは、器用にこなしていたが、姐さんたちが言うように、どれも中途半端だった。

少なくなつたとはいえ、目の肥えた客の前で披露出来る芸でないことは、稽古を重ねるごとに、自覚するようになった。

三味線の腕は、ますます磨きがかかった。

三年が経つと、小糸はもう文句なしの一人前の芸妓で、お座敷のかからぬ日はないほどの売れっ子になった。

気が強く男を寄せ付けない、気風のよさが売りであった。

何もかも順調に運んでいると思っていたとき、富絵の耳に透が九兵衛の老舗和菓子屋に、婿養子に入る話が飛び込んできた。

これが小糸の耳に入ったとき、彼女の取り乱しように「まだ吹っ切れてなかったのか」と驚き、不安になった。

「あんた、自分が一人前の菓子職人になったら、どこか遠くに行つて一緒になろうと言つたじゃない」

小糸は、以前二人でよく行つた動物園のベンチに座つて、透をなじつた。

「そのために、嫌な客の席にも出てお金を貯めたんだよ。私が嫌になつたの、大家のお嬢さんの方が芸者よりいいんだよ」

こんな言い方をするつもりはなかったのにお座敷口調が出てしまった。

今でもそのときの気持ちは変わらないと、透は言つたが問い詰めても、言葉を濁して多く語ろうとしない。

「このまま芸者を続けていれば、いずれ旦那を持たされる。あんたそれでいいんだね」

男を追い詰めるだけと判つていても、三年間の思いの長けを、口にせずにおられない。

三年の間に、一方は実直な職人の風貌になり、自分は玄人風な姐さんで、いくら地味に装つても、素人の娘には見えなかった。

これでは自分の方が、変わってしまったと思われる。ずっと三年間秘めてきた想いはなんだったんだ。三年前には戻れない。

小糸はハラハラと涙を流し、そのままの顔を透に向けた。

小糸の特徴ある薄茶の瞳は、透を責めるのではなく、三年前を一人振り返るように、透の瞳を凝視していた。

小糸の瞳の中に透の顔だけが映っている。

「あの時この瞳に魅せられてしまい、思わず抱きしめた。そして結ばれた」

透は息を止めて、三年前の小糸の瞳の中へ入つて行こうとした。だが十七才と二十才に戻るには、住む世界があまりにも違つてしまつた。

旦那は「小糸のことは判つている。どうしても忘れられないのなら、外に囲えばいい」と言つた。だが彼女が納得するはずがない。自分も嫌だ。

何かを感じたのか、小糸は透にしがみ付いて来た。

「私はあんたを失うくらいなら、生きていたくない。今死ねば、あんたは私を生涯忘れずにいてくれるんですよ」

ちらほら見える人影も気にせず、小糸は泣きながら透の体を離さなかつた。

岩井栄太は夜中の堤防を、電球の切れた自転車を押しながら歩いてた。

彼は今年二十歳で、警察学校を終えて地域の交番所に配属になったばかりだ。

少し先に、もつれ合うようにして土手を下りてゆく、男女の姿が見えた。

自転車を止めたが、すぐに二、三歩行きかけたとき、下から「わああ」と男の声がし、合間に「ひィツ」とか「ううっ」とか、女のうめき声がある。

ただ事ではないと土手を駆け下りると、先ほどの二人らしき男女が倒れていた。

一ヶ月後。

初手柄をたてた岩井巡査と、指導に当る上司の野村巡査長が、交番に勤務していた。

「男は致命傷に近かったのに、女は比較的傷が浅かった。殺人未遂ではないのですか」

岩井栄太は、大事件に立ち会う機会を望む気持ちが強かった。

「男は死んでいてもおかしくない傷だったんですよ、女は相当の恨みがあったんじゃないのかなあ。かつての恋人が、自分を捨てて婿養子に入るとなれば、お決まりのパターンですよ」岩井は得意顔で言う。

「それが判断を狂わすのだ」

五十二才の野村は、厳しい声で言った。

「おまえがその場で、刺し違えと診た判断は正しい。刺し違えての自刃は、白虎隊の例もある。お互い強い信頼の上のことだろう。後の事情聴取で、互いの供述も一致しているから、覚悟の心中だ。持ちかけたのはどちらも自分からだ」と主張している」

世間話でなく要のことだと、野村は居ずまいを正した。

「男の傷が深く、死の直前までいったのは男への一途の想いからだ。だからといって、男の情が薄かった訳じゃない、惚れた女を

死なせたくなかったの思いが、手元を鈍らせたんだろう。いざとなったら女は強くて、怖いぞう。女は情。男は愛。これが傷の違いだ」

義太夫をやったことのある野村は、心中の男女の心情を語った。

男女は別々の病院で治療を受け、別々に引取られた。

男は、婿養子先の家へ。

先に退院した女は、母親の元へ。

「行き着くところまでいったんだ、それで満足して忘れることだ。透は命を懸けてお前を生かしてくれたんだ。自分を大事にしなきゃいけないよ」

富絵は、一言も喋らぬ娘のそばを離れずに見張っていた。

傷が癒えて、母親が目を離したすきに、娘はとんでもない行動に出た。

指を切り落とし、透が稽古で使っていた扇子に、血で「愛」の文字を書き残すと、行方知れずになった。

切り落とした指は、紅指だった。

二十年の歳月が過ぎた。

界限は時代とともに寂れてしまい、かつて花といわれた芸妓達も、多くは街を離れた。

大きな料亭は、小料理屋に模様替えした。多くはバーやスナックになった。近年そんな場所で遊ぶ客が増えていた。

富絵は「三味線義太夫教授」の看板を掛けていたが、弟子は一人だけだった。

「小系ちゃん、そんな赤子をあなたに預けて、もう戻らぬと言っ

たのかい」

近所に住む弟子で、八十才になる竹也が尋ねた。赤子は女の子で、きりりとした眉の鼻筋の通った美人だった。

「戸籍の紙と一緒に、捨ててみたいに置いていったのさ。室井の籍に入っているけど、やはり父親の欄は空白だよ」

富絵は赤子と一緒に置いていった、びっくりするような大金に、少し不安を覚えながらも「決してやましいお金ではありません。生活費に使ってください。お元気で」の手紙を信じることにした。

「その子は、例の男の子じゃないのかい。近所じゃ、そんなこと言うのもいてね」

竹也は練習もせずに、噂話を始めた。

「向こうが入籍を急いだのは、娘が性質の悪いのに引つかかって、手を切る手段だったらしい。子が出来たが流産して離婚だ。どうにも後味の悪い話だわな」

昔は皆口が堅かったが、近頃は狭い界限にいろんな噂が飛交っている。

富絵は、以前から誘われていた石川県の地に移る決心をした。

富絵の先輩で、産前産後親身になって世話してくれた姐さんで【店をたたむから後をやらぬか】と言ってきたのだ。

石川県の小松市には透が住んでいる。そこに居れば何年経っても、きっと小糸は訪ねてくる。あの子は決して透を忘れていない。

竹也への挨拶もそこそこに、ようやく首の座った赤子を抱いて、石川県へ発った。

落ち着き先は加賀市。小松市の隣の市だ。温泉街から離れた駅のそばの、こぢんまりした店舗兼住宅。姐さんはホームに入居するので家財道具は、全て貰うことになっている。

客筋はいいからと姐さんは強調したが、富絵は孫のカスミが育つ環境が、一番の気懸かりだった。

富絵は家を離れる際持つて出たのは、子供のものと、三味線数棹、桐の箱に入った扇子と、小糸の命とも言える紅指だけだ。

後の物はすべて、竹也に処分を任せた。

富絵は加賀市で、十五年間おでん屋を営んだ。そして孫のカスミの高校入学を期に、店を売って小松に転居した。まだ体力に自信があったから、家の近くの介護施設の給食係として就職した。

カスミの高校の古典芸能クラブの部室で、部員の村上柚木と部長の室井カスミが、話し合っていた。

クラブ員はこの二人だけである。立ち上げたのはカスミ。柚木はカスミに引つ張り込まれた格好で、入ってきた最初の部員だ。

後には、カスミの美貌に釣られて入会した男子も何人かはいしたが、三味線や義太夫、歌舞伎などにはまったく興味をしめさず、すぐ退部してしまった。結果、笛が少々出来て、曳山歌舞伎に出演経験のある、柚木だけが残ったのだ。

二人とも高校二年生。一年間カスミがみっちりしごいたので、柚木の語りも、どうにかものになってきた。歌舞伎の所作も出来る。何しろ二人しかいないから、全部自分たちでやらなければならぬ。

「これからも部員が入って来る見込みはないし、この辺で成果を見せなきゃならないと思うの」

机に顎を乗せて「ふん、ふん」と、頼りない返事を繰り返す柚木を無視して、カスミは彼の前に立ちはだかるように立って、自分の意見を述べた。

「お祖母ちゃんが給食の手伝いに行ってる小波介護施設が、私たちの第一回の発表の場になるんだから、緊張感を持って練習に励んでよ」

カスミはいつものように命令し、柚木は気のない返事を返す。

二人は小、中学校は違っていたが、進学校の今の高校で一緒になった。

二人が住む小松市は、子供歌舞伎があり、その舞台となる曳山は、二五〇年の伝統を誇る見事なものだ。

子供の頃祖母に連れられて、曳山の出るお旅祭りに毎年来ていた。カスミの目当ての露店の店など見向きもせず、神社の参詣もそこそこに、祖母の富絵は曳山の前へ走った。

曳山歌舞伎は、二町が演題の違う出し物で競い合うように、毎年子供が演ずる。

語りの太夫と三味線は大人である。プロを雇うこともあるが、ほとんど市内の人間が受け持った。そのような芸事が盛んな土地である。たいがい三味線と太夫は夫婦者だったから、一軒家に住まわせて食事の面倒を見て、丸ごと抱えて何人もが習ったという。

八町の曳山町はそれぞれそうしたものだっただけ、向本折の市

の墓地には師匠たちの墓石が多くある。弟子たちが建立したものだ。

そんな土地柄なので、芸に厳しい富絵をうならすこともあった。それでも殆どの場合「まだまだ」といって、帰ってくる自分三味線を出して、なぞっていた。三味線は太棒で音は力強く、弾き語りの義太夫は、子供心にも近寄りたいたいほどの迫力だった。

カスミは、富絵が東京で芸者をしていたことは知っていたが、なぜ自分が祖母と暮らすことになったのか、詳しく聞いたことがなかった。ただ富絵がいつも口にするのは、「二代続けて父親の欄が空欄なのは、お前の代で終わりにするんだよ。しっかり男を選んで、結婚するんだよ」という言葉だった。

富絵はカスミには、芸事はすべてやらせたが、強く勧めることはなかった。興味をもって打ち込むと、自分で手ほどきをした。そのときは、人が変わったように厳しかった。

カスミは、浄瑠璃三味線が気に入った。「義太夫はどうするんだい」といわれて、柚木を仕込むことにしたのである。

学校の部活のことだから富絵は、「二、三年でもものになるほど甘くない」と言っ、鼻で笑っていた。

「演目は太十でいこうと思う」

カスミはそう言っ、黒板に「絵本太閤記十段目 尼崎の段」と正式名を書いた。

これは二つの町内がおはこにしている演目である。太十に始まり、太十に終わると言われ、義太夫の基本の演題だ。

「ユツキが十次郎やって、初菊はカオルに頼む」カスミは幼馴染のカオルの名を挙げた。一緒に日舞を習った時期もあった。カスミはもう止めたが、カオルは名取を目指してまだ頑張っている。高校は違うが構わない。

「僕が十次郎やったら誰が語るんだよ」

何も聞いていないように見えて、頭のいい柚木はすっかり要点を押さえる。

「ユツキのチチにたのむよ」

彼女はさらりと言った。柚木は驚いたがカスミは平気で続けた。

「ユツキの家の蔵へ練習に行ったとき、チチが仕事しながら太手のさをりを語ってるのを聞いたの。これが断然素人離れしてるの。この土地で何年も聴いていけば、やれるんじゃない。私頼んでみる」

カスミの中で、もう今回の図面が、出来上がっているようだ。

「演れるとしても、承知しないだろう」

柚木は、無口で息子にさえあまり笑顔を見せない、和菓子職人の父親が、承知しないだろうと思った。しかし、曳山の芝居は毎年欠かさず観ていたのは知っていた。

「嫌じゃないならやれるよ」

簡単にそう言っつて、カスミは取り合わない。

柚木は、仕事一筋で息抜きも知らないような父親に、この期に興味の一つも持つて欲しいと思ひ、カスミの案に賛成した。

「でも初菊はカスミで、三味線はお富さんでもいいんじゃない」

柚木はカオルという知らない女の子に、躊躇していた。

カスミは「お富さんは、プロだから駄目」と、にべもなかった。カスミの三味線の腕は、富絵も認めていたが、本気で仕込む気はなかった。

自分の高い芸の力を封じて、おでん屋を営業したり、施設の給食スタッフに応募して、生活を支えているのは、カスミには普通の娘らしい幸せな結婚を望んでいるからだ。

だがカスミは、祖母が期待する幸せな結婚を目指すつもりはない、大学に進み確かなキャリアを身に付けて、将来自立して祖母の面倒をしつかりとみるつもりでいる。

「間に合いそう」柚木は心配そうに言った。

カスミはこれには答えず「一度貸してもらった、どらと法螺貝をお願いするわ」と命令口調で言った。

カスミは自分が柚木の父親と交渉するといったが、柚木は自分で打診した。彼女が駄目なときのショックを心配してのことだった。

思いもよらず、父の正男は承知した。「二度ほど三味線と合わせたい」ということで、カスミは村上菓子店の蔵へ行った。

蔵を使うのは、三味線の音も太夫の声も大きいので、近所への遠慮からである。

正男は、柚木が言っていたほど気むずかしい男ではなかった。ひどく口は重い、ソフトな感じの男前だ。

小さいときから、家に男つ気のないカスミは最初とても緊張したが、いつもの彼女に戻つて、ポンポンとダメ出しをするから、正男は思わず苦笑した。

「これでいけるだろう」と正男が言い、夕食を一緒にと言われた。

このとき初めて柚木の母親は、彼が小学校入学後亡くなり、以後親子二人の生活であることを知った。そして、賄いのおばちゃんか休みだからと、近所の二十四時間営業の食堂へ行った。日常の家庭に並ぶような普通のメニューがたくさんあり、安かった。

「おばちゃんの飯より美味いんだ」

柚木は得意気に言う。ちよくちよく利用するらしい。

食時の間、カスミと柚木は、校内の話やテストの話など取止めのない話で、盛り上がっていたが、正男は一言も口を挟まなかった。

食事が済むと、山間部のカスミの家へ帰るバスに乗るため、駅まで送ると言う柚木と一緒に食堂を出た。

早めの夕飯なので街はまだ薄明るかった。

柚木はカスミと並んで歩き始めて、自分たちが人目を引くカットブルだと気付いた。

柚木は身長もあり、父親似の美形だと周りから言われていたが、正男は年齢以上に老けて見え、年頃になった頃はずっと老人のように思っていた。

柚木は、モデル体型のカスミのせいだと考えて、そっと横目で彼女を見た。

いつも正面で彼女を見ていたような気がするが、横顔の方が美しいと柚木は思った。

学校では、彼女は肩までの髪を、垂らしたままにしていたし、時には後に輪ゴムでしばっていた。

部室では特別に詰めてきた、梅干とのり弁をかつこんでいる。急に沸き上がったギャップの大きさに、柚木はドキドキし始めた。

早くに母を亡くしていたので、年配の女性や一、二才年上の女の子からは、みように親切にされたり、可愛がられたりしたので、当たり前になっていたのか、女子に特別な感情を持つことがなかったが、「何で急にカスミに」と、柚木は何気なく送ると言ったことを後悔した。同時にカスミがどう思っているのか、気になった。ますます人目が気になる。駅はすぐそこだが、自分の感情がカスミに悟られるのではないかと、突然大声で言った。

「駅はそこだ。これでいいだろう。気をつけて帰れ」

これだけ言うと、もう背を向けた。

「暗くなって来たじゃない。襲われたらどうするの」

カスミは悔しそうに叫んだ。

「そんな暇人がいるか」

柚木は全力で走っていった。

発表会は二週間後と決定した。

演出はカスミの中で仕上がっていた。

先日の駅の出来事以来、柚木との間に微妙な空気が流れているのを、感じている。

十次郎と初菊の出が勝負だが、子供歌舞伎で初菊を演じたことのあるカオルに任せて大丈夫だ。衣装もカオルが調達してくれる。カスミは三味線の稽古に集中した。

思いがけなく見事な子チの語りに、圧倒されたからだ。

小波は市内でも大きい介護施設だから、広い部屋にはちよつと高くなつた舞台があり、金屏風が用意されていた。

柚木は珍しく緊張した顔で口をきかない。

「親父のことが心配だ」と言っていたが、チチは目を閉じて椅子に深く腰掛けていた。

その落ち着きに、カスミは自分も度胸が座つてきた。実はカチカチになつていたので。

さすがカオルは舞台慣れしていて、十次郎の柚木に、最後の手直しをしている。

カスミはそれも気になつたが「集中集中」と、自分に言い聞かせた。

屏風の後ろから柚木の口上と拍子木が部屋いっぱい響き、ざわざわとしていたお客は静かになつた。

お年寄りの客の後ろには、若い看護師さんや給食の人、リハビリ師の人もいる。富絵も柱の影に隠れるようにいる。

思ひの外の人数に、嬉しさが先にたつた。

最初に三味線の出。それに乗って、「久方の……」と太夫が語り始める。

この地で育つたものなら、関心がなくても一、二回はきつと耳にしているはずだ。

楽しみにしていた人も、そうでない人も、黙つて聴いてくれるありがたい観客だつた。

太夫の一声から、カスミの撥が決まり最高の音を弾き出した。

富絵の三味線を借りたと言つたが、腕に合わぬといわれ、そ

の代わりに糸の調整を念入りにやつてくれた。

何よりも太夫と、三味線がびつたり合わなければ、聞き苦しい。

太夫の語り口調、声の調子も、三味線と合わなければ語りづらい。

土壇場になつてやはり心配なのか、富絵は、控えの部屋にやつて来た。

彼女は一度だけ、チチと音合わせをした。

同じ三味線なのにこんな違うものかと、驚くほど富絵の撥は冴えた音を生み出した。

十次郎が上手から登場。

踊り衣装の柚木は、本当の役者のように美しかった。嫌がる彼を押さえつけるようにして、カオルと二人して白塗りしたので。

「討ち死にする武士の……」

太夫は、信長を討つた明智の嫡男、十次郎が婚約者の初菊を残して、出陣する覚悟を語る。それに十次郎の所作が付く。

柚木は子供の頃、一度演じたことがあるのと、カオルの特訓が効いて、結構見せる。

この後、覚悟を立ち聞きした初菊が出てきて、行かせたくないと言説くのだ。

そして叱られた初菊が、泣き泣き兜を手に十次郎と踊る。最初の一歩の見せ場だ。

カスミの演出のヤマ場でもある。

初菊が、柚木の作つた鎧櫃から扇を取り出す。そうして静かにゆつくりと聞く、そこには赤黒ずんだ「愛」の文字が。「愛」の兜をかぶつた武将になぞらえたのだ。カスミが富絵に黙つて持ち

出したものだ。

十次郎がこれを取ろうとする、いやいやと首を振る初菊。一人になった初菊が、振袖に扇を乗せて、座ったまま後ずさり、下手に下がっていく。

カオルは、悔しいけど美しい、衣装といい踊りといい、文句なく観客を魅了した。

「鎧の袖にふりかかる」と太夫は言葉長く引つ張りながら語る。袖に降りかかるのは初菊の涙である。

先に舞台を下りた柚木が、屏風の上から小さく切った紙を、ちらちらと落とす。ここぞとばかりにカスミは、泣き三味線を入れる。

同時に耐え切れないように、絞るような泣き声が出た。富絵だった。そして顔を覆ったまま、その場を走り去った。

初菊の泣きそのままのような、富絵の嗚咽が入って、観客は乗ってきたようだ。つられてもらい泣きする客もいる。

カスミは撥を持ち替え、もう一度三味線の位置を確認した。これからは素語りの義太夫だ。語りのみ義太夫を聴かすには、客に通がないと難しい。チチは少し顔が蒼い。

「幼稚な演出で、気を削いだのだろうか」

カスミが弱弱しい笑みを向けると、チチは「よろしくお願います」と、一人前扱いをしてくれた。光秀の出は、先ほどのゆつたりした調子から、重厚な雰囲気になる。

金屏風の裏から小道具の蛙の声や、拍子木の木が入る。黒子の柚木が、間を外さずピタリと決めてくれる。

間違えて実の母を刺し殺した光秀を、諫める妻の操のさわり。

そして柚木がどらを鳴らし、法螺貝を吹いて戦場の様子を現す。

瀕死の状態の十次郎が戻ってくる。すがり付いて泣く初菊、死に別れの場面だ。

「妹背の別れ愛着の道に引かるる……」

チチの高音の伸びのある声に、すすり泣きが漏れる。カスミはそつとチチを見た。

彼は前列の隅に居た「あかね」と名札をつけた女性を、何度も見ていた。先月駅で保護された女性だ。どちらかと言えば、端正な顔立ちだが、ザンギリ頭にしていて、若いのか年寄りなのか痴呆特有の表情だ。

あらぬ方角を見ながら、指は正確にカスミと同じ動きをしている。彼女の紅指は、第二関節から下が欠落していた。